

太陽のイメージⅡ

——童話にみる飛翔の意味——

津守房江

はじめに : 子どもが太陽に対して持つ力動的イメージとして、飛翔感と云うことを考えたい。オI報では人間の行爲の原型であるくり返しと回転から上昇のイメージを生むこと、及び上昇のイメージは成長感と結びついて感得されることを見た。今回の飛翔の問題は、この延長と考えられ、上昇の大きさと速度が加わったものと思う。従ってみずから飛ぶことを主として扱い、向こうから飛んで来るものについては別の意味を持つのでここではふれない。童話には飛ぶことを扱った作品は非常に多い。この中で飛ぶということがどのようにとらえられているかを見、また自由な環境の中でかかれた子どもの絵と生活記録の中にこのことをたずねて、兩者の重なり合いの中に飛翔の意味を考えた。

飛翔を可能にするもの : 多くの童話の中に、飛ぶことに関して翼や乗物や鳥等が出てくる。子どもの遊びの中にも布をかぶって月光仮面になったり、紙で翼を作って脊中につけて天使ごっこをして遊びはじめのを見る。子どもは翼をつけたりすることによって飛ぶ世界の入口に立つことが出来る。飛ぶために翼や乗物等を用いるのは、外面的事実であるが、それ以上に大切なのは心の中にある飛ぶのだという本気さである。飛翔を内面的現実としてとらえ、このために何か人を飛ばしめるのかについて書いているのが、ジェームズバリである。ピーターパンの中で(あのタオのピーターのように飛ぶことがきつと出来るのがむしやうに信じてしまえば、多分私たちだって飛ぶことが出来るかもしれません。)(私たちが飛べないのに、鳥が飛べるのは、ただ鳥が飛べるという完全な自信を持っているからにすぎません。なぜなら自信を持つことは、翼を持つことになれますから。)と言っている。人を飛翔させるのは、がむしやうな自信であるというのである。がむしやうな自信ということは速度の早い回転のイメージであり、これが飛翔のイメージへと向う。「おばあさん

のひこうき(佐藤さとる作)の中のおばあさんは、蝶を見て蝶の羽根のように美しい模様を編もうと夢中になる。一匹の蝶がさそいとなって、おばあさんの心は回転し、この心を編み込んだ羽根は生きてるように浮び上る。おばあさんの編もうという熱意が編物を浮び上らせるのであるが編んだものが翼であるということと外面的事実と内面的現実とか調和を保っている。子どもの絵の記録の中にも6才10ヶ月の女児のかりた渦巻と湯気のような曲線の絵がある。この後4才9ヶ月の時パーマンと渦巻と湯気を一枚の絵の中にかいている。渦巻(回転)から上昇の湯気とパーマンという飛ぶ人物とを結びつけて感得していることと思う。同じ子どもが夢中になって仕事をしている母のそばで遊んでいたが、仕事が終わった時「さつきおあさんの頭に風車をつけたら廻ったね」と言う。ガスストーブの上に風車がつけてあり熱い空気が上ると廻るのを毎日見ているこの子は、仕事に熱中する母を回転のイメージでとらえている。人が飛翔を内面的現実として感じられるのは天にも昇るようなおもいを持った時である。

飛翔と光 : 飛翔のイメージは輝やかしさを持っている。多くの作品は飛んだ時の光について語っている。このことはオI報で絵本の中の太陽についてふれた。「風の玉子たち」(ボードワイ作)はグライダーに乗る少年少女たちの実際の経験をもとにして書かれた作品であるが、最初に飛んだ時の感じを(あたりは光と静かさに包まれた)と言っている。また「とろ船」(ヒルダリス)では(金色のイノシシは日の光に輝やいていました)とある。

子どもに飛翔が輝やくイメージを持ってとらえられていることは絵の記録に見られる。6才7ヶ月の時蝶とおひさまを作ってるの」と言いながら糸で蝶の形を作り、翼に光をあらわす糸をつけた。小学校入学後の充実したこの子の生活から見て、その時が輝やかしさと飛翔感に充ちていたと言える。6才8ヶ月の時、連続的に書いた6枚の絵は、

ぐつたりと坐つてゐる猫が立ち上り、鳥にかわつて目を輝やかせ翼を持って飛び立つプロセスがかけられてゐる。翼には光の粉がかりてある。この絵をかけた次の日に「あたしやうべ夢みたよ。すごく脊が高くなつてトート(父)とカーカ(母)が飛行機できて、それよりも高いの」と言っている。飛翔が光に向つてなされるから、その輝やかしさを持つことになるのであろう。ピーターパンには(いかにも百万もの金色の矢がその島のありかを子どもたちに示してりました)とある。光に向つて飛ぶことを強く願つたのは、アンデルセンの主人公たちである。親指姫はもぐらと結婚して土の中で暮さねばならぬ時、おひさまに悲し別れよう。この時燕が(もつとおひさまの美しく照している国へ飛んで行く...)ことをさそう。燕に乗つて飛び上る親指姫は喜びに輝やけてゐる。この飛翔によって花の天使へと変身する。「マツケ売りの少女は(マツケは晝のひなかよりあかるくなつたほど輝やけて燃えた。...)二人は地面を離れ、明るく光の中を高く所へ飛んで行った。)みにくくアヒルの子も人魚姫も別の世界へ行くほど大きな飛翔であり主人公たちは別の自分になる程大きな変化をする。変身する程大きな飛翔は劇的である。

傷つきながらの飛翔：飛翔は重力を克服して飛び立つのであるから意志の働きがなければ出来ない。落ちることを恐れる心は、7歳の王子たちのパラシュート訓練の中にえがかれる。それを克服する戦を(独力で空の深さと真剣にとりくまなければならぬ...) (自分自身の意志の力をはかる...)と言う。大地の衝撃を待ちかまえ、心の中で戦うだけではない。飛ぶものを傷つける矢が下から放たれる。アンデルセンの「悪い王様」には傷ついた天使が血を流して飛ぶ様子がある。4才5ヶ月の子は、これと同じイメージの絵をかく。けがした天使は血を流し、青黒い画面にわしとつばめが飛ぶ。混沌の時期が長かったこの子は、やがて明るく充実した幼稚園年長組となり、6才過ぎには美しい光り輝く天使や鳥のある絵を数多くかくようになった。(天使の血の一滴は鉛のように重く...)とアンデルセンが言っているが、この子が傷ついた天使をかけたような時期には、その心の重さに目をとめながら見守っている周囲が必要なので

あろう。

飛翔感と成長感：成長ということイメージとしてとらえるなら、混沌とさまよひの回転から速度を早め凝縮した自己を持って別の世界へと飛んでいくととらえられる。従つて飛翔感と成長感が同じものとして童話の中にえがかれ、子どもも成長感と飛翔感を重ねて見てゐる。成長することは飛ぶことである。ウエンディをさそうピーターパンは永遠の子どもであり、子どもの本質とも言える存在である。大人になった時ウエンディは飛べなくなる。(陽気でむじゃきで、気ままになくなるから...)飛べないのだと言う。しかし「おばあさんのひこうきのおばあさんは飛んだのである。月の光の中ではあるがやつくりと飛び、この後編物は止め、一人暮らしをよして孫と一しょに居ようと決心する。これも老いに対する適応として成長と見ることが出来る。時には大きく、時には小さく成長するのが生涯を通してくり返される。小さなさまよりは日常的なことであり、小さな成長は本人にも気付かない。ただ混沌のあとに心地より夢のような感じがするのであろう。マイケルの言葉として、尊敬してゐたお父さんさえ(ぼくが殺した海賊より小さいや...)と言っている。「ノンちゃん雲に乗る」のノンちゃんも優等生の目ではなく、別の目でワニバク小僧を見るようになった自分に気付く。

おわりに：子どもたちは飛ぶことを内面的現実として、生き生きとした飛翔のイメージを持ってゐる。子どもに飛べるかどうかたずねるなら「飛べない」と答えるだろう。これは外面的事実を言っているのであり、答えた子どもが飛翔のイメージを持ってゐないかと言うと、絵や遊びの中に無意識の中からこぼれ出たものとして多くの表現がなされてゐる。私たちは科学的であるというもののために外面的事実の世界のみを重視する。現に見えてゐないものを想像しえたいものかどうしてそれを実現しようと望み、成長することが出来るのか。成長するものは、想像の世界を実に豊かに持つてゐる。すぐれた童話はこれを助けて子どもたちに別の世界への飛翔を可能にしてゐるのだと思う。